

発行所

公益社団法人
全日本仏教婦人連盟

〒151-0051 東京都渋谷区
千駄ヶ谷4-5-10-205
TEL 03-5772-0677
FAX 03-6434-0184
URL http://jbwf.jp

沙羅の樹

Saranoki

No.11

2019年春号

4月5日発行



去る2月13日(水)上野精養軒において新年修正会が開かれました。不忍池を一望できる会場で、全日本仏教尼僧法団笹川悦導理事長・導師のもと、修正会法要が厳かに執り行われました。

次に懇親会では東伏見具子会長が、昨年11月の印度山日本寺開山45周年、光明施療院開院35周年を記念する旅の、緊張の中にも楽しかった思い出を語って下さいました。また昨年末の天皇誕生日に陛下が会場で語られた美智子皇后への感謝と労いのお言葉に感動され、私たちがこのような言葉を身近な方々から受けることができるよう日々愛情を持って過ごしていただきたいと述べられました。

尼僧法団笹川理事長からはお正月に因んだお話を伺いました。七福神のお一人毘沙門天の生まれ変わりといわれた上杉謙信の幟旗にみえる百足には、足並みを揃える意味が、また今年の干支である猪には、猪突猛進と言われるように突進して行く意味があります。その両方ともが必要であることを、新しい年の始めに思い起こさせていただきました。

岡野郷子相談役は乾杯のご挨拶の中で、高齢者と若者との意識格差改革の問題にふれられました。さまざまな悩みを抱える若い世代の方々の眼

を宗教に向けさせるには、私たちのお守りしている美しく心とお寺のご本堂に多くの人々においでいただく、それがこれからの課題です。と新年にあたっての思いをお話されました。

末廣理事長は、仏婦のこれまでの活動を振り返るとともに、「子どもたちの未来のために」という仏婦の代名詞ともなっている目標に向かい、さらなる活動を続けて行く決

意を語り、篠田副理事長・松井理事が総会と古寺めぐりの事業予告をし参加を呼びかけました。

お料理をいただきながらの和やかな歓談の後、お楽しみタイムになり記念の品を楽しくくじ引きにより皆さまにお渡しいたしました。恒例になりました一人ひとりの自己紹介もあり、加用穂子副会長が謝辞を述べ、盛況のうちに修正会が閉会しました。



「新年修正会開かれる」

私たちの活動報告

各事業にご賛助及び
ご協力をいただき、
ありがとうございます。

1月1日～3月31日(順不同・敬称略)

▼新入会員紹介

正会員 阿部由美子

▼賛助金

大雄山最乗寺 総本山西教寺
シーエスジャパン(株)

▼福祉事業

(公財)全日本仏教尼僧法団
笹川悦導 末廣久美 河原時子

▼写経運動

大橋百合子	花岡眞理子	高橋節子
海老塚るり子	濱野富貴子	横山俊子
田中美恵子	猪瀬三枝子	栃澤元子
大橋聡衣	篠田節子	植松園子
花田照子	花田まさ子	磯部悦子
磯部恵子	出雲君美子	末廣久美
長尾節子	佐々木公子	桶屋良法
小峰みな子	遠賀令子	村上和之
塚田成子	海老名初江	

▼あおぞら奨学基金

無憂樹の会 塚田成子

あおぞら奨学基金の 現況のご報告

現在、東日本大地震の被災高校生6名の高校生の支援をいたしております。

今年度も一人元気に高校を巣立っていきました。

今後も継続して、子どもたちの成長に少しでも役に立ていきたいと思っております。

皆様のご理解ご協力を是非ともよろしくお願いいたします。

平成30年度支援 6名

福島西高校 3年女子
気仙沼高校(定時制)3年女子
大船渡高校 2年女子
石巻北高校 1年男子
石巻北(定時制)1年女子
2年女子

1月

1日 「全佛婦」128号発行

17日 (公社)日本仏教保育協会新年懇親会

23日 (公財)国際仏教興隆協会財団設立50周年・
印度山日本寺開山45周年・菩提樹学園創立40周年・
光明施療院開院35周年記念祝賀会

30日 (公財)全日本仏教会新年懇親会

2月

8日 世界仏教徒青年連盟村山博雅師 会長就任祝賀会

13日 新年修正会

14日 (公財)仏教伝道協会会長故沼田智秀師三回忌法要

20日 第115回文化講座・音楽法話「いのちのとしび」三浦明利師

第115回

文化講座

Report

第115回文化講座は2月20日(水)天王寺上善堂に於いて三浦明利師による、音楽法話「いのちのとしび」のご講演がありました。

三浦明利師は浄土真宗本願寺派龍王山光明寺住職をつとめながら、シンガーソングライターとして活動されており、2

児の母親でもいらっしゃいます。

第一部は日本の歌曲「早春賦」に始まり、三浦師による作詞作曲の楽曲をギターの弾き語りで演奏。

そして第二部ではサリーを身にまとい登場されました。このサリーは高校生の時、得度記念に母の勧めで訪れたインドで購入したもので、身につけると初心にかえり身の引き締まる服なのだそうです。その美しいサリーで2500年語り継がれている「キサー・ゴータミー説話」をパリー語と日本語の歌を交えた音楽朗読劇として演奏されました。

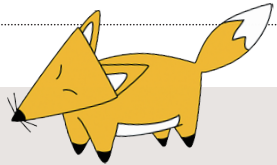
1時間半があっという間に過ぎ、歌声はもちろんのこと、ご法話の声为本当に優しく美しく心にゆっくり沁み渡るようで、涙を浮かべて聴き入る参加者もありました。素晴らしい時間をありがとうございました。



年間計画(2019年4月～12月)

4月5日(金)	「沙羅の樹」11号発行
4月3日(水)	第32回豊島区仏教会花まつりー共催ー(大正大学キャンパス内)
6月4日(火)	第7回総会(聖観音宗浅草寺)
6月20日(木)	第116回文化講座 京都古寺めぐり(相国寺等)
7月5日(金)	「全佛婦」129号発行
10月5日(土)	「沙羅の樹」12号発行
10月15日(火)	第66回全日本仏教婦人連盟大会(東京プリンスホテル)
11月1日(金)	第61回静岡県仏教婦人会・沼津大会
11月12日(火)	第117回文化講座(於石巻小竹浜集会所)
12月12日(木)	第31回成道会の集いー後援ー(有楽町朝日ホール)

国宝第一号である広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像参拝、通常非公開の相国寺伽藍の拝観と管長有馬頼底猊下講話、伊藤若冲で有名な承天閣美術館鑑賞など盛りだくさんの講座です。(昼食は「しょうざん」での溪涼床料理！)



☑ 相国寺の「宗旦狐」

昔、昔、江戸時代の初めの頃、相国寺境内に一匹の古狐が棲んでいました。

千利休の孫で三千家の礎を築いた宗旦が、相国寺塔頭の慈照院に茶室を作って茶会を開いたところ、この狐がこともあろうに宗旦に化けて見事なお点前を見せたそうです。それにしても客はだれも狐と気づかなかったとは、見事な化けぶりだったでしょう。益々調子に乗った狐はすまし顔でお点前をしていると、本物の宗旦がその正体に気づき、蔭で自分になりすました狐の様子を興味津々に眺めていたそうです。そして、宗旦が茶室に入ると、驚いた狐は一目散に逃げ出したという伝説です。

相国寺にはこの言い伝えにちなんで狐の宗旦がお点前をしている掛け軸があります。狐がいくら宗旦になりきっても、羽織の裾から尻尾が出ている絵柄は実にユーモラスです。

いつしかその狐は「宗旦狐」と呼ばれるようになり、相国寺境内の鐘楼のそばに「宗旦稲荷」として祀られました。祀ったのは宗旦その人でした。

「宗旦狐」は相国寺を飛び越して、門前の豆腐屋の経営危機を救ったり、豆腐屋の主人に大好物の油揚げでもてなされたり、相国寺界限の人々からも「宗旦狐」と呼ばれ親しまれました。

ところで、聞くところによると、相国寺の有馬頼底猊下は幼少の頃から琴棋書画の教を徹底して受けられたとのこと。琴、碁、書、画は中国では四芸と称され、雅人や徳行高く学問に通達した人のたしなみでした。有馬猊下の描かれる「宗旦狐」を是非拝見したいものです。(丸山弘子)

第116回文化講座

京都古寺めぐり ～広隆寺・相国寺～

6月20日

☑ 有馬頼底猊下と茶の湯 ～慈悲の行動～

有馬頼底臨済宗相国寺派管長は、相国寺の山外塔頭である金閣寺、銀閣寺の住職でもいらっやいます。その銀閣寺で平成23年に、続いて平成24年に金閣寺で、東日本大震災復興と国連難民医療支援等のために、「平和茶会」が開催されました。西の金閣寺、銀閣寺と東の鶴見大学が共催され、盛会の様子でした。

有馬猊下は濃茶席の席主を務められ、床の掛物に足利義満公の書「放下便是（ほうげすればすなわちぜなり）」を選ばれました。これは夢窓国師の言われた禅語で、「あれこれ余計な心配などせずに、各人がそれぞれ自分の与えられた場所で、真剣に物事に取り組むことだ」(注)という意味です。席主の心を反映するのが「床」ですから、猊下の「平和茶会」へのメッセージに思われます。

猊下は自らのお点前で参会者をもてなされた一方、弱い立場の方々への力強い支援を茶の湯に託され、慈悲の行動を体現されました。

室町時代の北山文化を築いた金閣寺と、東山文化を代表する銀閣寺という絶好のロケーションで、「平和茶会」は一服のお茶を介して慈悲の行動を世界に発信したと言えます。(丸山弘子)

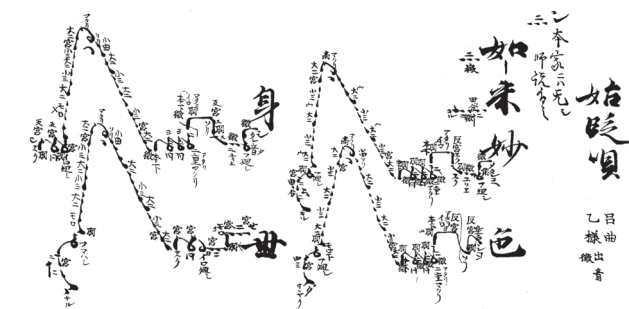
(注) 有馬頼底『やさしくわかる茶席の禅語』、世界文化社、2010年、107頁。



日本音楽 の みなもと

宗教音楽は神々に対する祭祀や礼拝に由来する純粹な歌唱を起源とし、仏教と音楽の関係においてはその始まりの一つとして、原始仏教教団成立以前の古代インドの祭祀音楽の影響から、釈尊の説法に節を付けて朗唱することがごく自然に発生したと考えられています。爾来仏教は今日に至るまで、時代や地域に根ざした様々な芸能文化、特に法要儀式において宗教的雰囲気を作り出す一助として大きな役割を担った音楽とは密接な関係にあり、これまでも多種多様な仏教の音楽が生まれています。

日本の仏教音楽のはじまりは、仏教の伝来とともに仏教儀式の大切な要素として伝えられた、外来音楽としての「声明」と「雅楽」であり、特に儀式音楽においては声明がその中心といえるでしょう。声明とは、法要儀式に際して経文や真言に旋律抑揚を付けて唱える仏教声楽曲のことで、もとは古代インドの五種の学問(五明)の一つ「言葉(声)の学問(明)」を意味していましたが、古来「梵唄」と呼ばれていた仏教音楽を、鎌倉以降は「声明」と呼ぶようになりました。日本における声明に関する最初の記録としては、天平勝



宝4年(752年)の奈良東大寺大仏開眼供養会において、総勢千人以上の僧侶により声明が唱えられたとあります。このような大法要では、雅楽が法会の式次第と一体化して、舞楽や法要中の奏樂など法会の莊嚴化に不可欠なものとなりました。その後、平安時代に遣唐使留学僧として唐に渡った最澄と空海が声明を伝え、それぞれ天台声明と真言声明の礎を築きます。鎌倉時代以降も、鎌倉新仏教と呼ばれる宗派が生まれますが、それらの宗祖はいずれも天台宗比叡山延暦寺で修行し

たため、声明に関してはいずれも天台系を継承し、以降日本における声明は天台と真言の二大流派を中心に発展してきました。声明の音楽理論や旋律様式、声樂的技法は、後世のさまざまな声樂分野の形成に多大な影響を与えました。和讃、講式、論義といった日本語による声明から御詠歌や念仏が派生し、これらが「語り物音楽」の原型となる「平曲」を生み、そして平曲が「浄瑠璃」「歌舞伎」という劇場音楽となり、さらに「歌い物音楽」という近世邦楽を築いていきます。このように日本音楽と芸能は、声明をはじめとした仏教音楽を抜きにしては成立しなかったといえ、声明が「日本音楽の源流」であるといわれる所以です。その後、明治維新の西欧化の波によって伝統音楽は衰退しますが、キリスト教の賛美歌を用いた伝道活動に刺激を受け、仏教界においても洋楽の導入が始まります。そうした動きは、西洋音楽・楽理を加味した仏教讃歌・仏教唱歌として普及し、また従来の御

6月4日

2019年度 総会

浅草寺本堂で、山家会法要(伝教大師最澄の命日)に参列後、五重塔内で定例総会。講演は浅草寺貫首田中昭徳猊下による講話「仏教音楽について」です。猊下は「野のほとけ」「観世音菩薩讃頌」などを作曲されています。(浅草寺の伽藍と賑やかな浅草の町も楽しみ！)

